

中間報告書

補助事業名	舞台公演記録のアーカイブ化のためのモデル形成事業							
事業期間	令和5年4月1日～令和6年2月29日			大学名	学校法人早稲田大学			
実施概要	<p>早稲田大学坪内博士記念演劇博物館では、舞台公演記録および関連資料をアーカイブするための各種処理をこなし、将来的に収益力に結び付けることのできる人材育成のために、令和4年度の外部評価者による評価を参考に連続講座を設計した。令和4年度の講座を「基礎編」、今年度を「実践編」とし、より専門的で実践的な内容に特化した講座とした。一方的な講義のみならず育成対象者自身が取り組むワークを導入しながら、舞台芸術の制作過程で生まれる様々な資料の保存の仕方や権利処理についての全10回の講座を実施し、さらにアーカイブの活用へと視野を広げ、考えを深める2回のワークショップを実施した。これらの成果をハンドブックにまとめた。令和5年度版『DONUTS BOOK 実践編』を現在作成中である。また、令和4年度において講座の補助教材とするため翻訳した、アメリカの舞台芸術アーカイブの手引書『PRESERVING THEATRICAL LEGACY』を参考に、有識者の協力を得て、日本の実情に合わせた『舞台芸術アーカイブガイドブック』を新たに作成中である。この『舞台芸術アーカイブガイドブック』は、海外とは様々な事情が異なる、我が国独自の舞台芸術業界に即した内容とし、育成対象者のみならず広く一般に公開する。それにより、専門のマニュアルがこれまで存在しなかった舞台芸術業界において、アーカイブ化への意識をより高めるとともに、実際のアーカイブ活動を促進する効果が期待できる。これらの事業を実施することにより、育成対象者がより実践的な知識や技術を身に着け、講座終了後もハンドブックやアーカイビングマニュアルを参考に継続的にアーカイブの実践に取り組むことを可能にするのみならず、本事業の成果を公共の知的財産として広く共有し、舞台芸術および舞台芸術アーカイブの一般の人々への周知にも寄与することを目指す。</p> <p>※ 詳細(講座名、講師名、コマ数、公演名、会場名、公演回数等)は下部の各活動欄に記入してください。</p>							
共催者名・後援者名・協賛者名等とその役割	舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM): 受講者募集、受講料徴収、講座運営							
全活動合計	計画	実績	差	計画と実績の差異理由				
来場者	105	143	38	昨年度の講座実施により、舞台芸術のアーカイブに関する関心が非常に高まったこと、同時に舞台芸術業界においても必要性が高まったことがまずは挙げられる。また、舞台芸術業界において知名度の高い演出家や制作者を講師として招いたこと、昨年度から事業の周知に努めていたことなどが、当初の計画を遥かに超える応募があった理由として考えられる。				
育成対象者	105	143	38					
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業職員	その他
	人数	27	30	9	22	2	26	27
育成対象者具体的な職業	既に舞台芸術に携わる人々を主な育成対象者として想定しており、実際に、俳優、舞踏家、ダンサー、演出家、舞台芸術団体の制作者、舞台技術者、舞台美術家といった実演家、および公共ホール職員、文化芸術財団職員、国立劇場職員等の文化施設職員が多く受講した。次いで、独立行政法人日本芸術文化振興会職員、博物館職員、大学職員、大学教員などの公共機関職員や、子供のものづくりワークショップを主に実施しているNPO法人、アクセシビリティ活動を行うNPO法人等の民間団体職員や、放送関連企業、舞台公演映像の配信会社、舞台制作会社等の民間企業のスタッフも多かった。また、大学院生を中心に次世代を担う学生の参加も目立った。							
アートマネジメント人材育成目標	申請時				達成状況			
	<p>現在、我が国には舞台芸術を専門とするアーキビストや、舞台芸術アーカイブないしは舞台芸術のデジタルアーカイブにおける専門家が存在しない。しかし、舞台公演映像の配信の増加や、舞台芸術そのものの必要性が問われる現在、舞台芸術アーカイブはますます需要が高まっている。本事業では、実際に劇団・劇場の制作現場や創作の現場で働く者、各アーカイブ機関・文化施設・自治体の舞台芸術担当者を自立的なアーカイブ活動ができる即戦力として育成する。と同時に、日本芸術文化振興会による舞台芸術情報ナショナルセンターの設置など舞台芸術専門アーキビストの需要の高まりを視野に入れ、舞台芸術のアーカイブに興味のある人材を専門的なアーキビストとして育成するところその特徴がある。支援プログラムを活用することにより、舞台芸術のアーカイブの意義を理解し、公演記録映像やチラシ等の関連資料をアーカイブするための諸技能、すなわち資料を適切な形式で撮影・保存し、権利処理や契約、各種処理をこなすスキルを有し、デジタルアーカイブまでをも含めたアーカイブ活動を自立的に行う人材の育成を目標とする。育成対象者には公演映像や関連資料を配信等の二次利用のために実践的に処理することを可能にし、収益化に結びつけるだけでなく、上演資料を貴重な文化資源としてアーカイブし未来に継承することへの意義を理解し、舞台芸術業界において舞台芸術のアーカイブを推進していく人材となることも期待される。また、講座終了後もハンドブックなどの教材を配布することで、育成対象者らの日々のアーカイブ活動をサポートするだけでなく、育成対象者同士の交流の機会を創出することによって、継続的な人材育成を目指す。</p>				<p>今年度の育成対象者は計画当初105名を想定していたが、募集開始後応募が予想を上回ったため、対面受講締め切り後、アーカイブ受講の締め切りを2か月ほど延期し、最終的に全体で143名の応募となった。これは舞台芸術専門博物館としての当館の知名度や社会的信頼に加えて、初年度の講座が好評を博した結果と捉えている。支援プログラムは、当館の人材や、舞台芸術の教育研究機能を持つ機関として培ってきたこれまでの知見や経験を活かし、連続講座とワークショップを中心に構築した。連続講座は、まずは舞台芸術のアーカイブの意義を理解するための導入として、当館スタッフによる講座とデジタルアーカイブ学会会長・吉見俊哉氏の講座を実施した。続いて、実際の舞台芸術創作活動と平行してアーカイブ活動を実践している木ノ下裕一氏(木ノ下歌舞伎主宰)、坂本もも氏(劇団範田遊泳/劇団口口制作)に現場に即した視点から舞台芸術のアーカイブについて、ご講義いただいた。さらに、舞台芸術業界においていち早く公演映像配信事業に着手した株式会社ネクステージ代表福井学氏に、公演映像の撮り方、撮影時の注意点や映像の活用方法についてお話しいただき、最後に福井健策・田島佑規弁護士に著作権と契約交渉について、受講者参加型のワークを交えながら解説していただいた。連続講座の締め切りはワークショップ形式でジャンパーシートを用いて舞台芸術のアーカイブの活用について実践的に理解を深め、有識者たちと活発な議論を交わした。本講座を受講することで、育成対象者は舞台芸術のアーカイブの意義を理解しながら、資料を適切な形式で撮影・保存し、権利処理や契約の各種処理をこなすスキルを身につけることができた。また、育成対象者が講座終了後も自発的にアーカイブ活動を継続できるよう、さらに本事業の成果を社会に還元すべく、日本の舞台芸術業界では初となる、舞台芸術のアーカイブ専門の『舞台芸術アーカイブガイドブック』は数回の有識者会議を経て難易度に差をつけて2段階の構成にしたものを作成中であり、講座の内容をまとめた『DONUTSBOOK』についても鋭意作成中である。</p>			
	申請時				達成状況			

<p>事業の社会的な役割、効果</p>	<p>本事業により、劇団や劇場、公演団体等が、一過性の公演実施にとどまらず、海外公演をはじめとする再演機会の創出や、配信・放送・出版といった二次利用による収益力向上など、自立的かつ継続性をもった事業活動を展開できるようになることが見込まれる。それはとりもなおさず、公演収入や公的支援のみに頼らない経済基盤を確立することでもある。加えて多くの劇団が抱える公演映像の死蔵問題に解決の糸口を与え、デジタル化と権利処理の推進により二次利用の可能性を大きく広げ、文化資源として適切な形式で将来に継承することを可能にする。また、舞台芸術専門のアーキビストや、デジタルアーカイブの専門家がいらない各アーカイブ機関・文化施設・自治体の実務者に、舞台芸術に特化したデジタルアーカイブの知識供与を行うことで、我が国の舞台芸術アーカイブの充実に貢献する。さらに、学生や舞台芸術アーカイブに興味を持つ者の育成によって、将来的に彼らが舞台芸術アーカイブの専門家として、劇場やアーカイブ機関、公共施設や文化施設に就職することを可能にする。そのことは我が国に存在しない舞台芸術アーキビストの職業化への端緒となるだろう。また、育成対象者が舞台芸術界のみならず、映画界、放送業界、出版業界に進むことで即戦力となるばかりか、業界全体の意識向上も期待される。本事業を通じて、舞台芸術の制作者と大学や博物館等の専門機関が共通知識基盤を共創し、デジタルアーカイブの発展を推進することで新たな産学官連携構造が生まれ、我が国における舞台芸術のさらなる発展が期待できる。さらにデジタルアーカイブを活用した学術分野での各種研究利用や、展覧会等を通じた舞台芸術文化の普及にも寄与しうる。</p>	<p>昨年度の育成対象者の内訳と、今年度の育成対象者の内訳を比較してみると、今年度は劇団や劇場、公演団体等の関係者が多く参加していることから、舞台芸術業界全体として、舞台芸術のアーカイブへの関心や意識、必要性が高まっていることがわかる。講座を設計する際には、一過性の公演実施にとどまらず、海外公演をはじめとする再演機会の創出や、配信・放送・出版といった二次利用による収益力向上など、自立的かつ継続性をもった事業活動を展開できるスキルやノウハウを身につけさせることを目標にした。そこで、現在演劇界で活躍している木ノ下歌舞伎主宰の木ノ下裕一氏や劇団範宙遊泳/劇団ロロの制作・プロデューサーである坂本もも氏による、創作活動と結びついたアーカイブ活動の実践についての講座を新たに設けた。それにより、舞台芸術の制作に関わる多くの育成対象者に、自らの活動とアーカイブ活動について具体的に考え、イメージを持ち、行動する契機を提供することができた。また、著作権処理や契約に関わる講座も継続し、すでにアーカイブに関わっている実務者や民間企業職員、公共機関職員にも、新たな知見を提供できた。さらに、学生や舞台芸術アーカイブに興味を持つ者の育成や、育成対象者同士の交流の機会を積極的に創出したことによって、舞台芸術アーカイブの専門家として劇場やアーカイブ機関、公共施設や文化施設に就職する可能性を創出した。1回限りではない系統だった連続講座の開催により、舞台芸術の制作者と大学、博物館等の専門機関、民間企業の連携を促進し、我が国の舞台芸術アーカイブのネットワーク構築にも寄与できたと考えており、我が国の舞台芸術アーカイブの充実へと繋がる活動ができていると自負している。</p>				
<p>事業に関して学会発表、メディアでの掲載実績や予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「高田馬場経済新聞」Instagram(2023/06/20) ・「範宙遊泳.HANCHU-YUEI」Twitter(2023/06/27) ・「公益財団法人セゾン文化財団」Twitter(2023/06/27) ・「京都市文化芸術総合相談窓口(KACCO)」Twitter(2023/06/28) 					
<p>事業で得た課題や経験、今後の活用方法</p>	<p>昨年度同様、有識者による外部評価委員会を設置しているので、課題については評価書をもとにまとめる予定である。今年度の経験や得られた知見は、連続講座のアーカイブ動画や講座内容をまとめた『DONUTSBOOK』として蓄積し、さらなるステップアップを目指す。また、イベントなどの開催によって育成対象者や事業協力者らとの繋がりを維持し、舞台芸術業界、民間企業、公共機関、アーカイブ機関のさらなる協力関係を開拓し、ネットワークの構築に向けた取り組みを主導していく。作成中の「舞台芸術アーカイブガイドブック」の公開と併せて、舞台芸術業界全体におけるアーカイブ意識の向上や、舞台芸術アーカイブの価値の社会的な周知、舞台芸術アーキビストの職業化、ひいては舞台芸術アーカイブの充実・発展に貢献していきたい。</p>					
<p>担当者所属・氏名</p>	<p>早稲田大学文学学術院教授・文化推進部参与 岡室美奈子</p>	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 15%;">電話</td> <td>03-5286-1829</td> </tr> <tr> <td>E-mail</td> <td>dnjp-office@list.waseda.jp</td> </tr> </table>	電話	03-5286-1829	E-mail	dnjp-office@list.waseda.jp
電話	03-5286-1829					
E-mail	dnjp-office@list.waseda.jp					

活動①

講座名 企画名	アーカイブ化支援プログラムの開発・設計							
講師名 出演者名	岡室美奈子、野原佳名子、中西智範、田村優依、櫻井裕子							
日時	令和5年4月から9月			コマ数	講座実施ではないため、コマ数はなし			
会場・教室	早稲田大学 早稲田キャンパス6号館			計画	実績	差		
				来場者	講座実施ではないため、人数はなし			0
				育成対象者	講座実施ではないため、人数はなし			0
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設 職員	公共機関 職員	民間団体 職員	民間企業 社員	その他
	人数	講座実施ではないため、人数はなし						
実施概要	舞台芸術のアーカイブ化に携わるアートマネジメント人材育成のために、連続講座を開発・設計する。令和4年度における育成対象者の要望や、外部評価委員からの「より実践的な受講生参加型の講座を」という意見を踏まえ、講座を開発した。講座の趣旨説明とアーカイブとは何かという根本的な議論から始め、昨年度よりも実践的で舞台芸術の現場に即した全10回の講座を設計した。育成対象者らが舞台公演を実施する際に保存対象となる資料の選定、舞台公演の記録映像の撮影方法、保存方法や、令和4年度からさらに踏み込んだ著作権と契約処理についての講座を、座学だけでなく育成対象者が主体的に参加するワークを導入しつつ実践的に、体系的に学ぶことのできる講座と、全2回のアーカイブの活用についてのワークショップの組み合わせとした。講座終了後も育成対象者が参照できるよう、講座の内容に追加情報をまとめたハンドブックである令和5年度版「DONUTS BOOK」については現在作成中である。							
アートマネジメント人材育成目標	申請時				達成状況			
	講座を令和4年度の実施内容からより実践的なものとするによって、即戦力となる技術を身につけ、劇団、劇場等に所属する育成対象者が、講座受講日からすぐにアーカイブの実践に活かすことができる。また、講座においてワークを用いることで、単に知識を学ぶだけでなく、実際のアーカイブ行為を想定しながら理解を深め、育成対象者は自らのアーカイブ活動に繋げていくことができるようになる。				昨年度実施した、テーマを絞らずに体系的に学ぶことのできる講座構成が非常に好評だったため、1・2コマ目で舞台芸術アーカイブとは何かという講座全体のテーマを視野に入れながら考えを深め、3～8コマまでの講座で実際の舞台芸術の制作現場・創作現場・映像撮影について学ぶことで、育成対象者がアーカイブ行為において重要な部分を占める、アーカイブの具体的なイメージができ、継続的にアーカイブの計画を立てられるような講座を設計した。また、9・10コマ目に著作権と契約の講座を実施し、契約交渉と著作権処理のケーススタディとワークにより、実際の契約交渉と著作権処理を行うための準備ができるようにし、その後さらに2回のワークショップを実施することで、舞台芸術アーカイブの活用について考えを深められるように講座の開発・設計を行った。これらの系統立てて設計された講座を受講した育成対象者は、アーカイブの活用までも視野に入れながらアーカイブを作成していかなければならないという実感を得ることができ、連続講座終了後には実際にアーカイブを作成しているという意思が見られた。			
活動で得た課題や経験、今後の活用予定	当初予定していた105名の定員を大幅に超え、143名の応募となった。そのうち文化施設や実演家、公共のアーカイブ機関職員など、舞台芸術制作者、舞台芸術のアーカイブに携わる者の受講が半分ほどを占め、舞台芸術のアーカイブの必要性の高まりを改めて実感するとともに、舞台芸術のアーカイブに関する専門的な知見の共有や課題の整理が急務であることを実感した。また、育成対象者の継続的なアーカイブ活動を支援するためにも、育成対象者同士や舞台芸術アーカイブに携わる有識者等との継続的な繋がりが非常に重要であるという課題も明らかとなり、この部分に関しては当館で当事業のイベントを継続的に開催していくことで、フォローしていきたい。							

活動②

講座名 企画名	【連続講座】理論編：舞台芸術アーカイブの意義と可能性							
講師名 出演者名	吉見俊哉(東京大学大学院情報学環教授)、 岡室美奈子(早稲田大学文学部教授・文化推進部参与)、 中西智範(演劇博物館)							
日時	令和5年7月25日(火)				コマ数	全2コマ(1コマ90分)		
会場・教室	早稲田大学 早稲田キャンパス 26号館1102会議室					計画	実績	差
					来場者	105	143	38
					育成対象者	105	143	38
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設 職員	公共機関 職員	民間団体 職員	民間企業 社員	その他
	人数	27	30	9	22	2	26	27
実施概要	1コマ目には演劇博物館前館長で当学文化推進部参与の岡室から趣旨と本講座の流れを解説し、演劇博物館の中西が、舞台芸術アーカイブとして何をどう残すべきかという根本的な課題設定から舞台芸術のアーカイブを「モノからコト」へのアーカイブとして捉えるという問題提起をし、育成対象者と意見交換を行った。2コマ目には令和4年度の育成対象者から反響の大きかった講座を担当した、デジタルアーカイブ学会会長の吉見俊哉氏による講座を実施した。舞台芸術アーカイブの意義と必要性について、音楽など他分野と舞台芸術の差異を考える育成対象者とのディスカッションを交えつつ展開された講座は、本連続講座全体の根幹となるものとなった。また、2コマ目終了後には懇親会や演劇博物館のデジタル化の取り組みや、アーカイブのデジタル化に関する様々な作業を紹介するデジタルアーカイブツアーを実施し、演劇博物館のアーカイブの取り組みについて学んでもらうとともに、育成対象者同士の横のつながりを強化する交流の機会を創出した。							
アートマネジメント人材育成目標	申請時				達成状況			
	舞台芸術の創作が公演で完結するのではなく、保存・継承・利活用に向けたアーカイブ化までを創作活動と捉えるよう、現在公演制作に関わる、あるいは今後志す育成対象者の意識を変革するとともに、舞台芸術の資料を未来に継承すべき文化資源と捉え、何を、いかに残すべきかという根本的な問いを提起することで、自身の劇団や団体のみならず、舞台芸術文化全体の将来を考え、舞台芸術アーカイブを担う人材を育成することを目標とした。				1コマ目の当館の中西担当講座における、舞台芸術アーカイブをモノの保存ではなくコトの保存として考えるのはどうかという問題提起から始まり、2コマ目に他分野と比較して舞台芸術とは何かについてを考えることで、育成対象者は舞台芸術アーカイブと舞台芸術の関係について思考を深めることができた。終了後のアンケートには「アーカイブの活用についてよく考えたいと思った」「アーカイブについてだけでなく演劇の歴史を俯瞰できて、演劇の未来を想像する手掛かりになった」「コトからモノが生み出す具体的な価値をじっくり考える機会となり、アーカイブする際、目的や活用方法が想像以上に多岐にわたる可能性があることを改めて実感した」との感想があった。また、懇親会やデジタルアーカイブツアーについては、「演劇との関わり、アーカイブ化に対するそれぞれの問題意識が分かり、大変充実していた」「横のつながりができたことに価値を感じた」「アーカイブすることについて背中を押された」などの声があった。			
活動で得た課題や経験、今後の活用予定	昨年度の講座実施の際に得られた、育成対象者同士の横のつながりを作る機会の創出が非常に重要であるという見地から、懇親会やデジタルアーカイブツアーを実施した。講座の初日にそのような機会の創出をすることができたため、その後の講座の中でのワークや最後のワークショップにまで育成対象者同士のコミュニケーションが非常に上手く行われているように感じた。しかし、昨年度の講座内容を把握していることを運営側は想定していたにも関わらず、昨年度の講座の理解が進まないまま、今年度の講座を受講している育成対象者が数人見受けられたため、育成対象者には継続的な受講と、前年度の理解度をフォローする仕組みや工夫が必要という課題が発見された。							

活動③

講座名 企画名	【連続講座】実践編：プロセスとしての舞台芸術アーカイブと舞台公演の記録映像の残し方							
講師名 出演者名	坂本もも(口ロ)、 福井学(株式会社ネクステージ) 木ノ下裕一(木ノ下歌舞伎)							
日時	令和5年8月8日(火)・8月29日(火)				コマ数	全6コマ(1コマ90分)		
会場・教室	早稲田大学 早稲田キャンパス 26号館1102会議室					計画	実績	差
					来場者	105	143	38
					育成対象者	105	143	38
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設 職員	公共機関 職員	民間団体 職員	民間企業 社員	その他
	人数	27	30	9	22	2	26	27
実施概要	<p>「実践編」として具体的な内容の講座を設計するにあたり、演劇界にて活躍されている木ノ下歌舞伎の木ノ下裕一氏、劇団口ロの坂本もも氏、舞台芸術業界において早く舞台公演映像の配信サービス「観劇三昧」を立ち上げた株式会社ネクステージ代表の福井学氏を迎えた。まず、1・2コマ目は坂本氏が公演制作業務の観点から、公演についての情報をいかにアーカイブし、団体の未来へ繋げるかという方法について、助成金申請や契約書、ガイドラインなどの実例を交えて解説し、3・4コマ目は福井氏が舞台公演映像の配信サービス「観劇三昧」を紹介し、舞台公演の記録映像を撮影する方法や注意点、最新技術などを駆使したこれからの活用の可能性について、育成対象者とのディスカッションを用いつつ、実際の公演映像を使用しながら解説。5・6コマ目は、実際に作品を創作しながらその過程をアーカイブし、公演パンフレット等を制作している木ノ下氏が、舞台芸術の創作の過程をいかにアーカイブし、創作へ還元させるかということを中心に、作品創作プロセスについて貴重な資料を用いながら解説するという講座を実施した。</p>							
アートマネジメント 人材育成目標	申請時				達成状況			
	<p>まずは劇団や劇場、公演団体が経済的に持続可能な活動していくことを支えるための制作業務という観点から、また舞台芸術作品を創作する観点から、両面からのアーカイブの価値について、実際に現場で活躍する講師の方々に解説していただくことにより、劇団や劇場、公演団体に所属する育成対象者らが興行を行いながら、公的資金のみを頼りにすることなく継続的にアーカイブ活動を行うことができるようになること、また、舞台公演の記録映像における撮影方法、保存方法を実践的に学ぶことにより、舞台公演映像を積極的に記録していくことができるようになることを目標とした。</p>				<p>これまでの事業実施により、舞台芸術をアーカイブする価値や必要性和、自らの劇団・団体の活動とを結びつけることの難しさが明らかとなっていたが、演劇制作の具体的な在り様やアーカイブの実践、公演映像の撮影方法について解説していただいたことにより、育成対象者らはそれぞれの具体的な活動と、アーカイブ行為を結びつけることができるようになったと見受けられる。終了後のアンケートには、「撮影機材としてカメラのみならず三脚への注意が必要なこと、bpsやfpsの意味など素人にも注意すべき基礎が理解できた」「実践的な講義で、演劇制作の現場の在り様やアーカイブ素材の貴重な事例紹介があり、具体的に明確なイメージを持つことができた」「画像が荒くても後で画像をきれいにする技術も進化しているため撮ることが大事と言われ、撮って残すことの意義を感じた」「劇団制作を行う上で普段雑多に保管している資料が「アーカイブ」するに値する資料だという自覚なく仕事をしていたため、整理と保管方法の見直しをする必要があると感じた」「初回で舞台アーカイブ=公演映像ではないと改めて認識したが、制作プロセスの過程がアーカイブとして価値あること(制作者本人サイドとしては勿論外部の者にとっても)が実感できたからとてもよかった」などの声があがった。</p>			
活動で得た課題 や経験、今後の 活用予定	<p>今年度は実践的な内容を念頭に置いて講座の設計をしたため、講座内でのディスカッションやワークなどの時間を鑑みて1コマ90分としていたが、大学での講義など人前で90分話し続けることに慣れていない講師の場合、体力的にも負担をかけてしまった。1コマの時間数を見直すとともに、それぞれの講師の講座内容によって、より講師に負担のない時間配分を考えるなどの配慮が必要である。また、対面受講生の人数を30名まで受け入れ可能としていたが、ワークの内容によってはもう少し人数を絞るなど、講座の運営と講座内容を鑑みた適切な受け入れ人数を探していくことの必要性が新たにわかった。</p>							

活動④

講座名 企画名	【連続講座】技術編：著作権と契約							
講師名 出演者名	福井健策（骨董通り法律事務所）、 田島佑規（骨董通り法律事務所）							
日時	令和5年8月29日（火）				コマ数	全2コマ（1コマ90分）		
会場・教室	早稲田大学 早稲田キャンパス 26号館1102会議室					計画	実績	差
					来場者	105	143	38
					育成対象者	105	143	38
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設 職員	公共機関 職員	民間団体 職員	民間企業 社員	その他
	人数	27	30	9	22	2	26	27
実施概要	令和4年度に実施した「著作権と契約」の講座では、あくまでも「基礎編」として、舞台芸術業界においてしばしば問題となる例を紹介しつつ、著作権と契約についてわかりやすく解説する講座を実施した。舞台芸術業界でも徐々に契約関係、著作権についての必要性が理解されてきているが、アーカイブ実務者や舞台制作関係者が著作権や契約について学ぶ機会は充実しているとは言えない状況である。そのため契約の手続きや著作権について、令和4年度の講座からさらに踏み込んだ内容をわかりやすく解説するだけでなく、さらには育成対象者が講座で学んだ知識を実際の活動のなかで活用できるよう、ワークを用いた講座を実施した。1コマ目には昨年と同じく骨董通り法律事務所の福井健策弁護士を迎え、育成対象者には事前課題を出したうえで契約の模擬交渉をするワークに取り組んでもらい、その後福井弁護士により契約書や契約交渉において気をつけるべき点について解説を行った。2コマ目には同じく骨董通り法律事務所の田島佑規弁護士を迎え、著作権処理のケーススタディを行い、育成対象者とコミュニケーションを取りながらそれぞれのケースについてわかりやすく解説するという講座を実施した。							
アートマネジメント人材育成目標	申請時				達成状況			
	「基礎編」で学んだ内容はあくまでも最低限の知識を扱ったため、今年度は権利処理についてより必要な知識を学ぶとともに、具体的な事例を用いたワークを行うことで、実践の場をなかなか想定しにくい権利処理において、育成対象者が講座で学んだことをそのまま活用できるようになること、また実際の権利処理のケースを学ぶことで、育成対象者が上演資料のアーカイブ化や二次利用を自立的・主体的に行うことができるようになることを目標とした。また、この講座の受講によって、舞台芸術業界における権利処理の意識変革が進むとともに、業界全体において、上演資料のアーカイブ化や配信等の二次利用がさらに容易になっていくことも期待される。				権利処理と契約というテーマはアーカイブ活動を行う上で欠かせないものである。昨年度配布したハンドブックなどを参考資料として、第9・10回それぞれの講座で事前課題を出し、講座の中では実際のケースを想定したワークやケーススタディを行った。そのことによって、育成対象者は単に座学で知識を身につけるだけでなく、具体的な状況を想像し、実際の権利処理や契約交渉に応用できる力を身につけることができた。終了後のアンケートには、「昨年を踏まえたスピード感と、ロールプレイングのおかげで、契約書を読むトレーニングのような時間だった」「事前課題に取り組んだことで、当日の講義の理解に役立った。課題の契約書は実践的な内容で突っ込みどころも多く、隣席の人と話し合い（交渉）が弾んだ」「田島先生のご講義も盛りだくさんの内容でためになった。8つのケーススタディが与えられ、具体的な課題を考えることで理解がはかどった。ある程度の量の課題をこなさないと現場で使える理解に至らないと思うので、事例が多いのは助かる」「実際の契約書を使っただけのワークショップと解説は、頭を絞って、実際のよく身に付いた。また、クラスの人とも仲良くなるきっかけにもなり、契約の面白さも感じる事ができた」「ケーススタディが普段にも使いやすくてイメージも湧きやすい、まさに痒いところに手が届く設定ばかりだった。きつこの事例を見た人・団体は自分の場合に当てはめて考えることが出来ると思う」などの声があがった。			
活動で得た課題や経験、今後の活用予定	昨年度の講座内容を復習したうえで事前課題に取り組み、講座当日に実践的なワークやケーススタディを行うという構成は、育成対象者からも非常に評判が良かった。やはり、契約や著作権等の権利処理については、専門とする人以外にとっては用語や文章が難しく、それにも関わらず対応する機会がないという実態がある。知識を提供するだけでなく、育成対象者らが身につけた知識を活用し、トレーニングするというまさに実践的な場が一番求められていると感じられた。そのため、来年度以降の活動においても、身につけた知識をアウトプットすることができるような、実践的なトレーニングの場というものを引き続き提供できるようにしたいと考えている。							

活動⑤

講座名 企画名	【連続講座】舞台芸術アーカイブの活用ワークショップ							
講師名 出演者名	半田桃子(株式会社momocan代表)、 後藤隆基(立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター)、 吉見俊哉(國學院大學)、 岡室美奈子(早稲田大学文学学術院教授・文化推進部参与)、 中西智範(演劇博物館)							
日時	令和5年9月15日(金)				コマ数	全2コマ(1コマ90分)		
会場・教室	早稲田大学 早稲田キャンパス 26号館1102会議室					計画	実績	差
					来場者	105	143	38
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設 職員	公共機関 職員	民間団体 職員	民間企業 社員	その他
	人数	27	30	9	22	2	26	27
実施概要	実用的な知識と技術を身につけた「実践編」全10回の講座後に実施するワークショップでは、令和6年度事業に想定している講座テーマの入口として舞台芸術アーカイブの活用をメインとした内容とした。劇団ゴジゲンを任意団体から法人化させた経験を持つ株式会社momocan代表の半田桃子氏、コロナ禍において上演されなかった公演資料を集めた演劇博物館の展示「ロスト・イン・パンデミック」を担当した後藤隆基氏をアドバイザーとして迎えた。冒頭、半田氏からは継続的な団体運営の観点から、また後藤氏からは研究者としての観点からそれぞれの経験に基づいた舞台芸術アーカイブの活用についての話題提供があり、その後育成対象者は事前課題として取り組んだ、国会図書館が提供しているジャパンサーチの機能を使って、自らが作りたいアーカイブを作る課題について、希望制で発表してもらった。そして、育成対象者はグループに分かれてそれぞれの作ったアーカイブについて批評し合い、アーカイブを作り、活用することについて気づいたことを話し合った。そして、第2回の講座に引き続きアドバイザーの吉見俊哉氏により、全体としてアーカイブの活用と演劇性について全体としてのコメントをいただき、最終的には当館のスタッフやアドバイザーと育成対象者で、アーカイブの活用についてディスカッションを行った。							
アートマネジメント人材育成目標	申請時				達成状況			
	全10回の講座で舞台芸術アーカイブの理念と資料の保存について見識を深めたのち、最後にアーカイブの活用について、舞台芸術制作者と研究者である2人のアドバイザーからそれぞれ具体的な活用について知り、アドバイザーらと一緒に考え、ディスカッションすることによって、アーカイブ活動において主軸となる「保存と活用」の両輪を考え、日々の活動に反映していくことのできる人材を育成する。また、来年度にアーカイブの活用について学ぶための準備として、アーカイブ活動における「保存と活用」が、どのような循環モデルを生み出せるのかまでを視野に入れて考えることのできるアーキビストの人材育成が期待できる。				事前課題に取り組む時間の短さや、ジャパンサーチのシステムそれ自体の使いにくさもあり、育成対象者らは事前課題に少し苦労したようだった。しかし、ジャパンサーチの使いにくさも含めて、育成対象者が積極的に、アーカイブを作る目線や利用者の目線から様々なアーカイブの活用を含めて、アーカイブをどのように作っていくことが可能なのかについて考え、意見交換をすることができた。様々な立場から集まった育成対象者が舞台芸術のアーカイブの活用を見据えた保存について、具体的な課題と可能性について、会場全体でディスカッションを行うことができた。育成対象者からは、アーカイブ実務者は利用者の目線から、劇団やカンパニーの制作者らは自らの団体のアーカイブを見てもらうという目線からなど、普段アーカイブを利用する以外の立場からアーカイブについて考えることができたという声が多くあった。			
活動で得た課題や経験、今後の活用予定	当事業において育成対象者を募集する際、学生や研究者、劇団やカンパニーの制作者、舞台芸術関係者、劇場や公共ホールのスタッフ、アーカイブ機関の実務者など、非常に対象を広く設定しているため、育成対象者によっては事前課題へ取り組む時間を捻出することに苦労していたようだった。そのため、育成対象者それぞれの立場を考えてより取り組みやすい課題の作成が1つの課題である。また、グループワークを行うことによって育成対象者同士の交流の活発化が見られ、それは横のつながりを増やし、舞台芸術アーカイブの活動における協力関係を作ることに繋がるため、今後も引き続きこのような交流の機会の創出に尽力していく。							